# THE ULiCS TIMES

Vol.3　July 2018

2018年7月25日(水) 神戸大学附属図書館学生チームULiCS　https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/


## 新宿区立漱石山房記念館を訪ねて

夏目漱石と聞けば皆さんは何を思い浮かべるだろうか。『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』、高校の教科書で読んだ『こころ』が懐かしいという皆さんもいるのでは。授業を終えてもなお「ああ、あのKが出てくる話ね、面白かったよね」などと、話題に上る作品も珍しい、と高校にいた時分考えていたことを覚えている。私はといえば、『草枕』や『三四郎』など数冊読んだ程度である。そんな私だが、東京に行く機会があり、夏目漱石ゆかりの地を訪ねてみることにした。

東京、早稲田駅と神楽坂駅との間に位置する「新宿区立漱石山房記念館」。新宿生まれの漱石が晩年の９年を過ごし、『こころ』など多くの作品を作り上げた「漱石山房」、その地に整備されたのがこの記念館だ。住宅街の中に突如現れるスッキリとしたモダンな姿は、見る者にワクワクと期待を抱かせる。中に入るとまず、カフェと読書スペースがある。ちなみにこのブックカフェ、『吾輩は猫である』に登場する「空也」の餅や最中、漱石の愛した「祇園坊柿」の味を楽しめるというから嬉しい。さて、次は展示スペース。一階から二階まで、文書資料に留まらず、書斎の再現なども見られる。漱石の作品紹介もさることながら、印象深いのは、展示「漱石をとりまく人々」で描かれる、漱石と漱石を慕う人びとの交流の豊かさだ。漱石山房には門下生たちが集い「木曜会」が開かれたそうだが、『赤い鳥』の鈴木三重吉や『古寺巡礼』の和辻哲郎を始め、そうそうたる顔ぶれである。あの岩波書店の創業者である岩波茂雄もその一人であり、『こころ』は出版社として発刊した最初の小説でもある。漱石の人間的魅力を、周りの人びとを通して垣間見る、そんな貴重な体験ができた。

皆さんも、訪れてみてはいかがだろうか。漱石の愛読者はもちろん、あまり読んだことがないという方にもおススメしたい。漱石の魅力に触れて、記念館を出る頃には、きっと読みたくなる。作者から本へ、そんな本との出会い方もあって良いと思う。

カフェのメニューやグッズには、『吾輩は猫である』のモデルとなった、漱石の福猫が描かれている。記念館の裏手には「猫塚」が残る。

ちなみに、ブックカフェには漱石の作品だけでなく漱石が読んだ作品も置いてある。イギリスに留学経験のある漱石が、そうした外国の文学に強く影響を受けていたことがうかがえる。

私がおすすめしたいのは、この二冊だ。『吾輩は猫である』は猫目線でユーモアたっぷり。また三四郎もストーリー展開がわかりやすいので楽しめるだろう。

（文学部２年 長田）

他大学図書館紹介

# 名古屋大学　～中央図書館＆ジェンダー・リサーチ・ライブラリ～

名古屋市を走る地下鉄名城線の名古屋大学駅を降りてすぐ。広がる名古屋大学東山キャンパスの中でも、広いグリーンベルトの奥に見えるのが、名古屋大学中央図書館。多くの専門図書館・図書室が整備されている名古屋大学の中でも、一番の蔵書と学習スペースを持つ。地下1階から4階建ての広い館内は、学外者でも資料の閲覧目的であれば利用できる。

入館すると、フロア全体に及ぶ広い学習スペースやラーニングコモンズに多くの学生。館内放送で修学サポートイベントのお知らせ。展示物や図書を見てみると、様々な分野のものが配置され、なんとも中央図書館らしく、神戸大学生には新鮮かもしれない。同じ大学図書館ながら、専門図書館ごとの特色の濃い神戸大学とは違った趣である。

ひと段落したら、入り口付近のカフェで休むのも良いし、名古屋大学に関係する蔵書を集めた「ゆかり交流ラウンジ」（3階）の書架を眺めてみるのも楽しいかもしれない。さらに、名古屋大学には中央図書館のほかにもユニークな図書館がある。

キャンパス構内に入ろうとすると左上の立て札がキャンパスの方向を知らせてくれる。右上は中央図書館入り口。入り口付近にスターバックスコーヒーの店舗が入っている。

▶HP http://www.nul.nagoya-u.ac.jp
▶住所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町

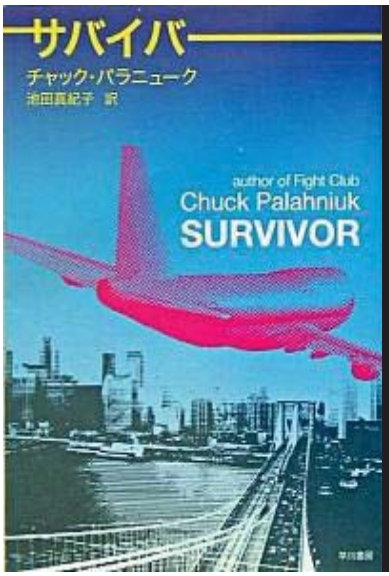
昨年2017年11月1日、名古屋大学に新たに開館したジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）。女性・ジェンダー・フェミニズムに関わる様々な書籍が収められている。こちらも学外者でもカウンターで手続きをすることで入館できる。入館し、書架の蔵書タイトルを眺めて気づくのはその分野の多様さ。一口に「ジェンダー」と言っても、分野横断的な論点や、その発展歴史の深さがうかがえる。昨今、取り上げられることも増えたジェンダーについて、このような専門図書館で触れて見るのはどうだろうか。

上写真が入り口。こちらの図書館の建物にもカフェが併設されている。左下写真2枚はオールジェンダー用の多目的トイレ。

▶HP http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp
▶住所：〒464-8601
名古屋市千種区不老町

写真は2017年11月10日に筆者撮影
筆者：ほぬのはんぷ

# 書評 BOOK REVIEWS




## テンダー・ブランソンかく語りき

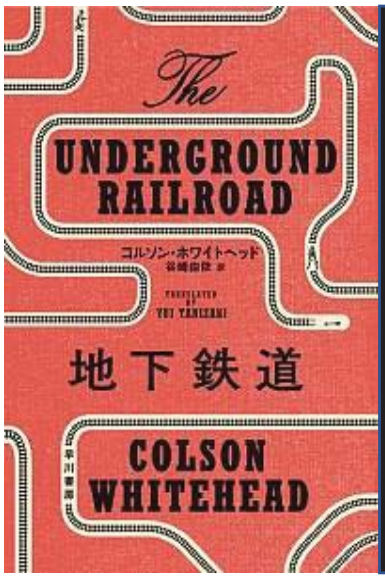
サバイバー
チャック・パラニューク著
池田真紀子訳
早川書房／2001年

随分昔に映画化の話が出ていたが、911の発生により頓挫してしまったようで、その後音沙汰が無い。語り手であり、狂信的カルト集団の生き残りであるテンダー・ブランソンがハイジャックを仕掛ける場面から幕を開けるので無理もない話だ。とはいえこの小説の骨子は飛行機パニックものではなく、彼がなぜそのような犯行に至ったのか、コックピットのボイスレコーダーに事の顛末を語る回顧録である。ハイジャックと言いつつも、録音の時点で乗客は全員降ろされていて、パイロットも先ほどパラシュートで離脱したばかりだ。つまりブランソンは、たったひとりで無制御飛行中のボーイングと運命を共にしようとしており、我々がこれから聞く（読む）のは、長い長い彼の遺言という事になる。

代表作である『ファイト・クラブ』同様、パラニュークの描く人々は破滅を美徳としているのか、本作もその例に漏れない。エンターテイメント作品とは形容し難く、悲劇と呼べるほど美しくもない。主人公の語りは厭世的なユーモアと諦観に満ちていて、しかし内容が凄絶なあまりその諧謔味は上滑り気味だ。他にも癖の強い登場人物、例えば「未来予知の超能力を持つ美少女」という漫画みたいなヒロインも登場するが、意外なほど彼らの印象が薄いのは、ブランソンが自嘲気味に発する毒の方が強烈だからだ。彼の異常性は語りの中で繰り返し披露される日用品がらみの雑学に顕著であり、その執拗なまでの知識の羅列はある意味ピンチョン的ですらある。一応それらの言及にも理由があって、読者はなるほどと思うと同時にひどくやるせない気分になる。

救いの無さは最初から提示されており、読後の満足感も当然無い。それでも彼の呪詛に耳を傾けてみたい方は、是非このフライトに挑戦して欲しい。得難い類の疲労があなたを襲うはずだ。機内放送を聞き逃さぬよう。シートベルトを緩めぬよう。この物語は終りから始まり、楽園に向けて降下しているのだ。

（職員　山下）




## マイノリティ・ディストピア

マーガレット・アトウッド著　斎藤　英治訳
『侍女の物語』早川書房　2001年
コルソン・ホワイトヘッド著　谷崎　由依訳
『地下鉄道』　早川書房　2017年

「エマ・ワトソン、本の妖精になる」と題されたニュースが先日あったことを覚えているだろうか。フェミニストとしても活躍する彼女が、慈善団体の活動として、マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』100冊をパリの街中にメッセージ付きで隠したというものだった。『侍女の物語』は、出生率が急激に低下した近未来で貴重な出産能力を持つ女性達が道具として管理される全体主義社会を描いた小説である。出版された80年代当時から物議をかもしていたが、トランプ政権誕生以降のディストピア小説ブームによって一躍世界中の書店で必ず複数冊置かれるほどの人気を博すようになった。遂にはリベラルのバイブルとしての地位を確立し、ドラマ化もされた。そして、この小説には「地下鉄道」という抵抗組織が登場する。これは黒人奴隷の逃亡を助けるために鉄道に関連した暗号を使っていた史実の秘密組織にあやかったものだ。

そして今回紹介するもう一つの作品、『地下鉄道』は、黒人奴隷の少女コーラが、組織の力を借りてジョージア州のプランテーションから逃亡する19世紀前半頃の物語だ。ただし、歴史と違っている点が一つあり、地下に蒸気機関車が本当に走っている(どうやって排煙されているんだと言いたくなるが、工事が大変だったの一言で済まされている)。コーラは逃亡の過程で彼女を捕らえようとした白人の少年を殺害してしまったため、一般市民に姿を見られればリンチされ殺されるという危険を背負っていたうえに、奴隷捕獲人の執拗な追跡からも逃れなければいけなかった。本書が描いているのは架空の未来ではなく(ほぼ)史実の過去であるが、黒人女性という二つのマイノリティを代表するコーラもまた、『侍女の物語』の女性主人公と同様に社会に管理された道具でしかなく、近代アメリカこそが彼女にとってのディストピアだった。

ディストピア小説の結末は、逃亡に成功するか社会に呑み込まれ死を迎えるかの二つしかない。コーラがどちらだったかは是非自身で確かめて欲しい。

（国際協力研究科修士２年　小林）

# 新入生による
# オススメの本紹介

**4月のまごまご読書倶楽部のテーマだった「自己紹介代わりの本」。今回はそのテーマに沿って、ULiCSに新たに加わった新メンバー各自が選んだ本をこの紙面で紹介します。**

## 人生を狂わす50の名著

三宅香帆、ライツ社、2017年

この本は「京大院生の書店スタッフが『正直、これ読んだら人生狂っちゃうよね』という名著を選んでみた」というブックガイド。でも、こんなに面白いブックガイド読んだことない。
読後の爽快感を保証します。騙されたと思って、ぜひ。

「私vs本」
海事科学部１年　桜井

## 星に願いを、そして手を。

青羽悠、集英社、2017年

青羽悠、2000年生まれ。小説すばる新人賞を史上最年少で受賞。彼のデビュー作となったこの作品の主人公は、宇宙が好きという共通点を持つ幼馴染の４人。しかし、大人になるにつれて、それぞれの思いは変化していく。思い出の科学館で再会し、自分の夢に向き合い始める彼ら。彼らの美しくさわやかな物語は、自分の将来を考える勇気をくれる。

「夏にぴったりのさわやかな物語」

文学部１年　岸本

## 凍りのくじら

辻村深月、講談社、2008年

人が抱くどんな感情も柔らかく肯定しながら描かれる辻村さんの作品。どんな人でも一人では生きていけないし、人と関わることをやめられない。誰もが人とのつながりを求めている中で生まれる寂しさや劣等感の名前を教えてくれる。

「SFって、すこし、不思議」
文学部　春野涼音(ペンネーム)

## 散り椿

葉室麟著、角川文庫、2014年

かつて藩を追われた武士である新兵衛は妻と死別し、妻との約束を果たすべく帰藩する。しかし、藩内には隠された秘密があることを知る。かつての親友、前途有望な若武士、亡き妻、それぞれが秘めた想い。―「**散る椿は残る椿があると思えばこそ、見事に散っていけるのだ。**」決して明かすことなく胸に秘めた想いでも、想いはいつまでも生き続ける。真っすぐに生きる人々を描く葉室麟による作品。是非読んでほしい。

「消えゆくとも消えぬもの」

文学部１年　馬場

## 夜は短し歩けよ乙女

森見登美彦、角川書店、2006年

京都のとある大学に通う「先輩」は同じクラブの後輩「黒髪の乙女」に恋をした。いろいろな作戦を立て彼女をなんとか振り向かせようとする「先輩」だが、一向に気づかない彼女。やがて二人は周りで起こる様々な事件に巻き込まれていく。石橋をたたいても渡らないほど恋に奥手な「先輩」は、果たして「黒髪の乙女」に自分の思いを伝えることが出来るのだろうか？二人の関係の変化に注目して是非読んでほしい。

「こうして出逢ったのも、何かの御縁」
文学部１年　なつほ（ペンネーム）

ULiCSでは新たに活動に参加してくれる方を募集しています。関心のある方はTwitterやメールアドレスからお気軽に連絡ください！
▶Twitter: @ULiCS_KobeU_Lib　▶E-mail: libr-students@edu.kobe-u.ac.jp　▶部室: 自然科学系図書館2階

# うりこスタンプ第2弾、完成！

昨年度から作成していたうりこスタンプが遂にこの春完成しました！今回は、第1弾のスタンプの利用状況から新しいスタンプを考えたり、アイディアを一般募集したりしながらULiCSのグッズ班が推敲に推敲を重ねて皆さんが使いやすいうりこスタンプを作りました。アイディアをくださった皆様、ご協力ありがとうございました。春からメンバーも増え、うりこグッズ作成案も沢山出ているのでご期待ください。

文学部２年　畠田

LINE STORE のクリエイターズスタンプから購入いただけます。ぜひ使ってみてね！

今回もお読みいただきありがとうございました。バックナンバーは附属図書館HPの「附属図書館学生チームULiCSについて」よりお読みいただけます。